

Tim O'Brienのヴェトナム表象

——*If I Die in a Combat Zone*に見る冷戦期初期の アメリカ社会と大衆

三牧 史奈

1. はじめに

Tim O'Brien (1946-) は、ヴェトナム戦争に纏わる自身のトラウマ体験を題材とした作品を度々発表してきた。アメリカ人作家によるヴェトナム戦争小説といえば、最初に彼の名前を思い浮かべる読者も今日少なくない。このように、O'Brien 作品はアメリカ国内外で高い知名度を獲得してきているのだが、このことは、彼の作品が文学におけるアカデミズムの領域で脚光を浴びていることのみならず、幅広い層の読者の需要をも満たしているという事実を物語っていると言える。O'Brien 作品に関する従来の批評の多くは、「ヴェトナム戦争文学」、すなわち、冷戦期のアメリカで確立した新興ジャンルにおいて O'Brien がどのような位置を占めているのかを特定することに専念してきた。あるいは、これまでの戦争文学のテキストとの比較分析を通して、O'Brien の戦争表象の特異性を明らかにしようと熱心に取り組む批評も数多く見られる。しかしながら、冷戦終結後 21 世紀を迎えた今日、かつての批評が構築してきた伝統的認識枠の外側へと O'Brien 作品の解釈を解放しようとする積極的な動きが顕著な形で見られるようになってきた。例えば、Alex Vernon と Catherine Calloway は、自らの戦争体験を素材とする O'Brien 作品のテキストを読解することは、戦後のアメリカ社会において風化の一途を辿るヴェトナム戦争の記憶を再評価する気運を高めることに大いに寄与し、このことが、20 世紀以後のアメリカが介入してきた中東での新たな戦争を理解する際の足掛かりにもなり得ると説く (1)。また、ヴェトナム戦争理解という目的に加えて、哲学的、倫理的、社会学的主題を積極的に取り扱い、その上ポストモダン主義的な観念との密接な繋がりをも示唆する O'Brien のナラティブは、中等教育及び高等教育における教育的素材としての高い価値を有しているとも評価する (2)。Stefania Ciocia は、ヴェトナム戦争表象を基盤

としながら人文学的諸問題の探求へと発展してゆく O'Brien 作品のテキストが持つ複雑さに関心を寄せているが、加えて、内省的な語りを特徴とする O'Brien 作品の語り手達が見せるアメリカ人としての自意識の中に西欧文化的価値観が多数引き継がれていることを指摘し、この西欧文化の遺産が彼の戦争表象に多大な影響を及ぼしていることを前提として作品解釈を行う (2)。その他、O'Brien を“A Trauma Artist”と称していることが明らかに示すように、Mark A. Heberle は O'Brien 作品におけるトラウマ表象とトラウマ体験の理解という主な二つの観点から読解を試みる。また、Susan Farrell など、フェミニズムやポストコロニアリズム的アプローチに基づいて O'Brien の戦争表象の分析を行う批評家も多く見られるようになった。

このように、様々な観点から従来批評が構築してきた伝統を乗り越えようとする試みが頻繁に出現する一方で、アメリカ軍事史上最も不名誉な戦争として認識されているヴェトナム戦争の再評価、または戦争文学研究などという限定的な文脈で作品を読解することが O'Brien 研究にとっては主流な手立てであると未だに見なされている感はやはり否めない。しかしながら、O'Brien が展開する作品世界を根底から支える基盤としての社会背景、すなわち、アメリカ冷戦期初期の社会情勢、及び当時の文化的営みや大衆心理等の重要性に着眼し、作品と当時の社会との関連性について紐解いてゆくような取り組みはこれまでの読解には欠落していたように思われる。そこで本論では、O'Brien 作品の原点ともいえる彼の処女作 *If I Die in a Combat Zone* を取り扱い、冷戦期初期のアメリカ社会への考察を主な解釈の柱として作品を読み直す。第二次大戦後のアメリカの急速な社会発展と相互に密接な関わり合いを持つ Baby Boomer としての O'Brien の人格形成に多大な影響を及ぼした当時の社会事情に着目することが、彼の作品解釈を方向付ける重要な要素の一つとして考慮するに値するものであることを本研究では新たに強調したい。ヴェトナム戦争が米ソ冷戦というイデオロギーの衝突の時代によってさらに外側から包含されていることを考慮するとき、冷戦がもたらした米社会への影響を連動させて考えることを抜きにしてヴェトナム戦争への理解を深めることができないことは明らかであるが、O'Brien は、個人的体験としての「ヴェトナム」を通じて、この負の歴史を生み出した冷戦が米国内にもたらした光と影を読者と共に探求しようとしているのだ。

2. 従軍責任を巡る葛藤 —— 冷戦期初期アメリカ社会における自由の危機

本作品は、O'Brienのヴェトナム戦争作品群の中では主題及び手法に関して彼の自伝的要素が最も強く表れた作品として評価されている。不正義の戦争を戦うべきか否かを巡るジレンマに陥り葛藤する主人公のモチーフは、本作品以降続くO'Brienのヴェトナム戦争小説の常套である。本作品は、主人公Tim O'Brien¹がジレンマを抱え葛藤する際の様々な心の動きを最も緻密に描く作品であるといえるが、主人公O'Brienの悩みは冷戦期、とりわけ初期の頃のアメリカ社会における文化的営みや当時の大衆心理に対する彼の鋭い洞察を伴って提示されている。

物語は葛藤に苛まれた主人公O'Brienの内的世界に主に光を当てているが、その中でも本研究にとって最も注目すべき部分は、アメリカ社会に対する彼の批判的眼差しが顕著に表れている箇所である。主人公O'Brienは、古代ギリシアの哲学者アリストテレス、ソクラテス、プラトンなどの理論をはじめ宗教的言説、あるいは文学テキスト等から獲得した知や理性を思考の拠り所として、社会的善に寄与する営みを追求することを自身の行動原理の理想として掲げているような、いわゆるインテリの青年として設定されている。彼がその知性を以て暴いてゆくのは、自身が帰属するミネソタの白人共同体の保守的な人々の、思慮深さや個性に乏しく、画一的、かつ、楽観主義的な姿勢である。主人公O'Brienの表現を用いて言えば、彼らはまさに“not very spirited people, not very thoughtful people” (13) であり、またそのような人間によって構成される共同体は“an empty, unknowing, uncaring, purified, permanent stillness” (208) という言葉によって特徴づけられるといえよう。共同体の人々は第二次大戦の戦勝国として冷戦期に国内外の様々な分野で著しい発展と繁栄を極めていったアメリカが掲げる正義の絶対性をすっかり信じきっているのであり、アメリカ国家の行く末を楽観視し続ける人々の様子は、ヴェトナム戦争が泥沼化した局面を迎えた1960年代後半になっても自国が戦う戦争の正しさについて疑う余地など一切ない姿として主人公O'Brienの目に映るのだった。次の引用は、アメリカの正義を盲信する市民達の安直な思考に対して、主人公O'Brienが自ら違和感を抱いていることに気づく場面である。

‘No war is worth losing your life for,’ a college acquaintance used to argue. ‘The issue isn’t a moral one. It’s a matter of efficiency: what’s the

most efficient way to stay alive when your nation is at war? That's the issue.' But others argued that no war is worth losing your country for, and when asked about the case when a country fights a wrong war, those people just shrugged. Most of my college friends found easy paths away from the problem, all to their credit. Deferments for this and that. Letters from doctors or chaplains. It was hard to find people who had to think much about the problem. Counsel came from two main quarters, pacifists and veterans of foreign wars. But neither camp had much to offer. It wasn't a matter of peace, as the pacifists argued, but rather a matter of when and when not to join others in making war. And it wasn't a matter of listening to an ex-lieutenant colonel talk about serving in a right war, when the question was whether to serve in what seemed a wrong one. (30-31)

ここから浮かび上がってくるのは、ヴェトナム戦争に介入するアメリカ国家の選択に悪を見出す主人公 O'Brien と、アメリカが戦う戦争の正しさを一貫して主張し続ける共同体の人々との間に生じている、ヴェトナム戦争に対する問題意識のズレである。このことに加えて、意見の相違を前提とした議論や交渉が双方の間にはもはや成立し得なくなっていることもまた注目すべき点であるといえる。本作品が作者の自伝性を強く反映しているという点を再び考慮に入れるとき、作中で言及される共同体の人々を特徴づけるこの楽観的な思考パターンへの主人公 O'Brien の不安は、1991 年に行われた Daniel Bourne と Debra Shostak とのインタビューにおける作家 O'Brien 本人の発言によってより明確なものとして捉え直すことができる。

One aspect [of the middle-western community] is my sense of bitterness about small-town Republican, polyester, white-belted, Kiwanis America. The people who vote and participate in civic events, who build playgrounds and prop up our libraries and then turn around and send us to wars, oftentimes out of utter and absolute ignorance. And I'm bitter about it. I'm bitter about people who say with a knee-jerk reaction, "let's go kill Satan." The Middle America I grew up in sent me to that war.

... That know-nothing attitude really disturbs and angers me. The Midwest for me is not just a sweet background I naively grew up in full of innocence and romanticism. I have a real bitterness towards it that lasts to this day. ... And, just to finish this little tirade of mine, above all my bitterness has to do with my hatred of Middle American ignorance. ... There's a laziness and a complacency, a kind of Puritan sense of pious rectitude, that you can tell really pisses me off. So when I write about it in part out of a sense of real rage and anger, justifiable rage and justifiable anger. (80)

対話の中で作家 O'Brien が強調するのは、アメリカ中西部の人々の、とりわけ道徳的、倫理的諸問題への無知・無関心、楽天主義であり、人々の姿勢に対する彼自身の呵責である。また、彼によればこの中西部共同体特有の画一性は同調圧力的な風潮へと発展してゆき、ヴェトナム戦争の不正義を主張する作家 O'Brien の自由意思を抑圧し、彼に従軍を迫る更なる圧力として顕在化してゆくのである。そして、この出来事こそが彼にとってのトラウマの記憶の一つとして認識されていることが明らかに述べられているのだが、このことは他のインタビューにおいて作家 O'Brien 本人が繰り返し主張する事実であり、本作品をはじめ彼の後の作品の主題としても幾度となく取り扱われていく重要な出来事である。

作家 O'Brien の故郷、ミネソタ州のあるアメリカ中西部は、アメリカのハートランド、つまり、心臓部分として一般的に認知されているように、国内の文化の均一性が最もよく保たれている地域、つまりアメリカの典型的な社会生活を最も鮮明に反映するエリアの一つである。また、1970 年頃まではこの地域の人口のおよそ 8 割を白人が占めており、冷戦期の白人中流階級層の生活が当時のアメリカ大衆文化全般の中核として位置付けられていたという事実に目を向けるとき、白人中流階級出身の作家 O'Brien にとって中西部という地域は、個人と共同体との間の限定的繋がりを超え、まさに彼個人とアメリカ国家までもを結び付ける中間組織としての機能を果たしていると考えられるだろう。従って、彼の共同体批判の先には、冷戦期アメリカ社会全体への批判が込められていると考えることもできよう。このことはインタビューにおける彼の発言の中で次のように示唆されていることから明らか

である。彼は中西部の画一性について、次のように述べる。

...it's not just Worthington; it's the whole country that sort of ticks me off. I go after Worthington only because I know the place well enough to make it particular in the details of it, but it's representative to me of a whole mindset in this country,... (Herzog *Vietnam* 90)

このように、作家 O'Brien 自身を投影する主人公 O'Brien の社会への鋭い洞察を伴った理性の眼差しは、冷戦期初期国内で顕著に見られた、アメリカの正義に対する政府や大衆のあまりにも過剰な自意識が次第に封じ込め的な圧力を伴ってゆく様を鋭く捉えているのであり、また、その心理的抑圧に対する主人公 O'Brien の葛藤は次の描写からも垣間見える。

Piled on top of this was the town, my family, my teachers, a whole history of the prairie. Like magnets, these things pulled in one direction or the other, almost physical forces weighting the problem, so that, in the end, it was less reason and more gravity that was the final influence... The decision was mine and it was not talked about. The town lay there, spread out in the corn and watching me, the mouths of old women and Country Club men poised in readiness to find fault. It was not a town, not a Minneapolis or New York, where the son of a father can sometimes escape scrutiny. (18)

引用は、主人公 O'Brien がヴェトナム戦争従軍という彼にとっての苦渋の決断に葛藤する場面を描いたものだが、ここで注目すべきは、主人公 O'Brien が、共同体による同調圧力を、まるで彼に対して常に目を光らせている監視の目のようなものとして捉えているという点である。この監視の目は彼の行動をその背後から常に検閲し続けているのだが、言うまでもなく、この眼差しが彼の自由意志を尊重するような寛容なものでは決してないということは明らかである。これまで分析してきたような主人公 O'Brien のミネソタ批判には、従って、冷戦期アメリカ社会の内部に実は同調圧力に象徴されるような画一的な社会風潮が既に内包されている可能性があることへの危惧が込め

られている。つまり、作中で彼が示唆するのは、多様性、複数性を重んじる自由な社会風潮によって支えられているはずの冷戦期アメリカ社会がその深部に秘める逆説、つまり、人々は帰属する共同体の画一的な風潮に迎合することで社会を生き延びているという事実である。このことは、権力に対する従僕としての彼らの本質を暴いている。

しかしながら、主人公 O'Brien の眼差しはヴェトナム戦争の不正義、そして、アメリカ社会における自由の危機を鋭く見抜いていながらも、彼は最終的にヴェトナムに従軍するという苦渋の決断を自ら下すことになる。それは、従軍責任を放棄することが既存の社会秩序からの逸脱を示唆し、帰属する社会を見失うことによって自らの存在が孤立してしまうことを彼自身が過剰に恐れたからである。

I did not want to be a soldier, not even an observer to war. But neither did I want upset a peculiar balance between the order I knew, the people I knew, and my own private world. It was not just that I valued that order. I also feared its opposite—inevitable chaos, censure, embarrassment, the end of everything that had happened in my life, the end of it all. (22)

このようにして、主人公 O'Brien は従軍を決意することによって、本質的には単一のイデオロギーによって統合された社会、つまり、民主主義的合意のプロセスに基づいた意思決定の自由が保証される社会とは相いれない、画一的な社会システムに彼自身自ら迎合し、従属的に生きることを選びとることになるのだ。このことは、主人公 O'Brien 個人の内部にもすでに社会への同調願望が潜んでいたことを示唆しているといえる。心の奥底に社会からの逸脱と孤独の恐怖を秘かに抱える主人公 O'Brien に象徴される人格は、他者あるいは社会集団の中に自らを位置づけることで初めて自己の存在意義を見出そうとする、いわば、50年代に David Riesman が出版した『孤独な群衆』の中で定義された他人指向型のパーソナリティを想起させるものである。社会秩序からの逸脱がもたらす孤独の恐怖に耐えかねた結果、不正義の戦争への参加を受け入れざるを得ないことで、主人公 O'Brien は自らを“coward”「臆病者」と見なす。ヴェトナム戦争に従軍した自らを「臆病者」として卑下す

るような否定的な自己評価は、本作品以降の O'Brien のヴェトナム戦争表象における代名詞にもなっている。

第二次大戦の勝利によって冷戦期アメリカは「勝者」としての自意識を確立することとなったが、本作の主人公 O'Brien の洞察は、この「勝者」のイデオロギーが保証する自由な風潮の社会の内部に潜む封じ込め的な圧力の本質を暴き出している。主人公 O'Brien のジレンマは、このようにして、ヴェトナム戦争の不正義を認識しつつも従軍の義務を受け入れるという、主人公 O'Brien にとっては悲惨な結末を迎えることとなるのだが、自身の運命がアメリカの他国への軍事介入に伴う社会の動向によって常に翻弄されてきたことを自覚する場面は特筆すべき点である。彼は自らの生を次のように振り返る。

I grew out of one war and into another. My father came from leaden ships of sea, from the Pacific theater; my mother was a WAVE. I was the offspring of the great campaign against the tyrants of the 1940s, one explosion in the Baby Boom, one of millions come to replace those who had just died. My bawling came with the first throaty note of a new army in spawning. I was bred with the haste and dispatch and careless muscle-flexing of a nation giving bridle to its own good fortune and success. I was fed by the spoils of 1945 victory. (12)

本作品に収録される^{祖国のために}“Pro Patria”と題された章は、主人公 O'Brien のアメリカ人としての自我形成のプロセスを読者に垣間見せる。主人公 O'Brien の語りは、彼の生と冷戦期アメリカ社会との密接な関連性について示唆しているが、上記の引用で彼が Baby Boomer としての自らの文化背景について言及するとき、読者は第二次大戦の勝利によってアメリカ国内にもたらされた恩恵を彼が十分に被ってきたという事実気付かされる。そして、この事実はアメリカ国家に対して彼が背負っている義務の重大さを物語っている。また同時に、Baby Boomer 世代の命が、第二次大戦で大量に失われた戦力を補完し、後にソ連との戦争のための戦力の一部として行使される運命にあることもまた示唆されている。まさに、主人公 O'Brien の生は冷戦期のアメリカ社会に複雑に組み込まれているのであり、このことを示唆する上記の引用は、

彼のヴェトナム戦争従軍の定めを暗示しているかのようだ。彼はアメリカ人としての自意識について言及しているが、そこには冷戦期アメリカ社会の繁栄のイデオロギーと共に、冷戦期のアメリカ社会の中で自律性を見失った主体として生きる彼自身の姿が皮肉にも象徴的な形で示されているのだ。

3. O'Brien の戦争表象

If I Die in a Combat Zone におけるヴェトナム戦争体験の語りは、一見すると性質を異にする二つの要素が複雑に絡み合ったものとなっている。作家O'Brienは本作品を「自伝」と称することで、本作品に描かれている出来事が事実に基づいていることをインタビューで主張している。一方で、彼はフィクショナルな技巧もまた同時にふんだんに作品に盛り込むことで戦争体験を描こうとする。彼はインタビューでは、この一見矛盾を孕む複雑な語りとその効果について次のように説明する。

...most of *If I Die* is straight autobiography. All of the events in the book really happened; in one sense it is a kind of war memoir and never intended to be fiction. It's not fiction. But...I tried to cast the scenes in fictional form. Dialogue, for example. Often I couldn't remember the exact words people said, and yet to give it a dramatic intensity and immediacy I'd made up dialogue that seemed true to the spirit of what was said.... Things like ordering chronologies, that's made up. I didn't follow the chronology of the events; I switched events around for the purpose of drama. (Schroeder 125)

上記の引用では作家O'Brienはノンフィクション的な語りを意図して本作品を執筆していることを宣言しているが、その一方で、登場人物の間であり得たかもしれない彼が主観的に判断する会話上のやりとりを作り上げて作中に挿入したり、出来事の時制を操作したりといった、作者による作為的な試みによって作中においてドラマ性を演出する効果を意図しているのだとも述べている。

従って出版当初から、本作品が備える複雑な語りの性質とそこに込められた作家の意図をどのように解釈すべきなのかという点に多くの読者は頭を

悩ませた。読み手は本作品を、フィクションあるいはノンフィクションのどちらか一方のジャンルに当てはめて解釈に一貫性を持たせようと考えたが、本作品の語りの複雑さは読み手側の更なる混乱を招くこととなった。このことは、1979年に出版された本作品の Laurel Edition 版にはフィクションを意味する“FIC”の文字がクレジットに記載される一方で、1987年版にはノンフィクションを意味する“NF”という文字に変更されていることから明らかだ。

読者や批評家の中にはノンフィクション性とフィクション性の双方を孕む O'Brien のヴェトナム表象と New Journalism との関連性を指摘するものもある。New Journalism の先駆者 Tom Woolf は 60 年代に流行した、従来のジャーナリズムの伝統を乗り越えるこの新しい表象媒体が、どのような意図をもって、またいかなるプロセスを経て生み出されたのかについて次のように説明する。

It was more intense, more detailed, and certainly more time-consuming than anything that newspaper or magazine reporters, including investigative reporters, were accustomed to. We developed the habit of staying with the people we were writing about for days at a time, weeks in some cases. We had to gather all the material the conventional journalist was after and then keep going. It seemed all-important to be there when dramatic scenes took place, to get the dialogue, the gestures, the facial expressions, the details of the environment. The idea was to give the full objective description, plus something that readers had always had to go to novels and short stories for: namely, the subjective or emotional life of the characters.

Woolf によれば、New Journalism という手法は、書き手が描こうとする対象の人物や出来事により深く関わり合って情報収集を行うことが前提となっており、対象についての綿密な取材を通して得られる多くの事実の情報を基盤としてナラティブは成立するものであるということだ。この様な表象手段を通じて、New Journalism を採用する作家達は作品を描く作業を通して、従来のジャーナリズムには成しえなかった、対象をより鮮明に描く技術を大成し

ようと試みたのだった。この様に、フィクションとノンフィクションの融合を特徴とした O'Brien 作品における戦争表象に対する混乱は、60 年代当時新しく流行した New Journalism という表象形式との類似点を見出すことで解消できたかと思われた。しかし、両者の本質を改めて厳密に比較するとき、New Journalism という語りの手法を引き合いに出すことによって O'Brien の戦争表象を十分に理解することには限界があることがわかる。というのも、O'Brien の独自の手法は New Journalism とは、次の点で本質的に異なっているからである。Woolf が説明するように、New Journalism があくまで事実には忠実な描写を基盤とするメディアであるのに対し、あたかもあり得た会話を主観的にでっち上げること、あるいは出来事の時系列をあえて操作することなどで事実事態を脚色しようと試みる O'Brien の手法は前者とは異なった様相を呈しているということをここで指摘したい。自らが体験した事実の語りにフィクション性をあえて取り込む技法に込められた意図について、本作品の巻末に収められているインタビューの中で O'Brien は以下のように語っている。

Through the magic of a story, as we watch characters have the same sensation of actually participating in events. Our heartbeats quicken. We shed a tear. We chuckle. We *feel*. It is one thing to understand that the American who was in Vietnam was morally ambiguous and morally complicated. It is another thing to feel personally ensnared in those ambiguities and complications. (219)

これまで見てきた O'Brien の複雑な戦争表象の基盤となっているのは、読者との間の心理的共鳴、あるいは想像力を駆使して達成できる感覚的な共感であるということがここから明らかになる。O'Brien が読者に対してこのような積極的な関与を求める姿勢は、本作品の主人公 O'Brien の語りの姿勢においても同じく引き継がれている。例えば、本作品において、主人公 O'Brien がしばしば二人称の語り手に扮して読者に語り掛ける様子もまた、読み手との心理的つながりを積極的に意識したものであるといえるだろう。二人称の語りはとりわけ彼の心理的葛藤や混乱が激しくなる場面において見られる。不正義の戦争に対する拒絶を抱えたまま戦地に赴く彼は、その不安を読者と

共有するために聞き手に対して語り掛ける —“You start muttering to yourself. You wish you had a friend. You feel alone and sad and scared and desperate. You want to run...you aren't a soldier. Not really. You don't *belong* here. Some ghastly mistake” (55)。あるいは、you と呼びかけながら、不正義の戦争を戦ったことに対する否定的な感情を読者と共に分かち合おうとも試みる。

You take off your uniform. You roll it into a ball and stuff it into your suitcase and put on a sweater and blue jeans. You smile at yourself in the mirror. You grin, beginning to know you're happy. Much as you hate it, you don't have civilian shoes, but no one will notice. It's impossible to go home barefoot. (203)

上記の引用は、ヴェトナムでの軍務を終えてアメリカへ帰還する際の主人公 O'Brien の心理を描写したものである。大義のない戦争へ従軍することへの葛藤、その上、戦場で体験した様々なトラウマを背負ったまま、再びアメリカ社会での一般の生活へ戻ることに対する複雑な心境が綴られている。二人称の語り手を用いて表象する主人公 O'Brien の語りのスタイルこそ、彼が読者と自身が抱える複雑な心理を共有しようとする積極的姿勢を顕在化させたものであるといえる。このことは Mieke Bal による、一人称と二人称の語り手の作用についての以下の定義を参照することによってより明確になる。

The pronouns ‘I’ and ‘you,’ as opposed to ‘she,’ ‘he,’ ‘they’ and the like, are empty in themselves. They do not refer outside of the situation in which they are uttered. Each utterance is performed by an ‘I’ and addressed to a ‘you.’ This second person is crucial, for it is that subject that confirms the ‘I’ as a speaker. (30)

Bal によれば、一人称の語り手 I と二人称の語り手 you は、語り手と聞き手という関係を通して互いの存在を定義し合うものであり、両者は常に互いの存在を意識し合っている。本作品では一人称の語り手としての主人公 O'Brien は二人称の語りを通して読者の存在を意識しているのであり、聞き手の立場である読者は主人公 O'Brien の主観的な語りを背後から支える役割を果た

す。主体性を保証された主人公 O'Brien が you と呼びかけながら、彼自身の体験について語るとき、聞き手は自らの視点と彼の主観的な視点とを重ね合わせる事が可能となる。つまり、一人称の語り手が持つ視点が聞き手との間で共有されるのである。

O'Brien のヴェトナム表象は、全てをフィクション化して事象を描くのではなく、ジャーナリスティックな手法に完全に依拠して表象するわけでもなく、あるいは当時の新たな表象メディアである New Journalism とも性質を異にする。彼の語りは語り手に対する読者の共感、または、作品解釈における読者の積極的関与を要求するものである。フィクション性を駆使して自らが体験した出来事を劇化する表象、二人称の語り手によるナラティブを通して読者との心理的つながりを図ることなど、これらの語りの装置を用いて読者に対して積極的関与を促そうとする O'Brien の姿勢は、読み手による開かれた解釈の可能性を保証し、または、複数の異なる意見が互いに交わりあう余地を認める言説空間を構築するのだといえよう。O'Brien が生み出す言説空間は、ハンナ・アーレントの言葉を借りれば「自由」な空間として定義できるであろう。アーレントは「自由」であることの本質を、「複数性」あるいは「人々の間の運動の空間」という表現を用いて特徴づけているが、仲正はアーレントの言う、「自由」が保証された空間について、次のように説明している。

・・・均質的な思考や行動パターンの人たちだけでなく、様々なタイプの人たちが存在し、相互作用することによって世界に絶えず変化があり、多様性が生まれるような状態が「自由」である。・・・「自由な社会」を守ることは、各人が様々な仕方でも自己形成しながら、交渉しあうことを可能にする「複数性」を守ることである。(46)

社会秩序からの逸脱に対する主人公 O'Brien の極度の恐れは、不正義のヴェトナム戦争への従軍という悲劇的な運命を引き寄せてしまうが、このことは一元的に統合された主義・思想を基盤として成り立っている社会の抑圧的世界観を示唆する。そのような社会はまさに、自由とは遠くかけ離れた様相を呈する社会であるといえるが、主人公 O'Brien は語りの装置を駆使することによって人々が互いに積極的に関わりあう自由な空間を、彼の独自の言説

空間の中に再構築しようとしたのだと考えられるのではないか。

4. 結

本研究は、Tim O'Brien が自らの自伝的作品の中で取り扱う主要なテーマ、不正義の戦争に行くべきか否かの決断に伴う葛藤のプロセスの中に、冷戦期初期アメリカ社会に対する鋭い洞察が見られることを明らかにしてきた。本研究における着眼として、主に冷戦期アメリカの文化や大衆心理に焦点を当てることにより、ヴェトナム戦争理解、または戦争文学の読解という旧来の批評的アプローチを乗り越え、O'Brien 作品が冷戦期初期アメリカ社会に対する示唆に富む作品であることが明らかとなる。

また、O'Brien はヴェトナム戦争従軍の責任を巡る自らの心理的呵責を語り伝える際、自伝的要素とともに文学的技巧をふんだんに盛り込むことによって、解釈における読者の積極的な関与を促すよう試みるが、彼の前衛的語りの手法は、トラウマ体験を有する語り手と、本作品が出版された 70 年代においてヴェトナム戦争健忘症に陥った読者との間の心理的共感を構築することを可能にする言説空間を支えるための装置なのだといえよう。

本論文における考察は、O'Brien がヴェトナム戦争という限定的な史実に言及し、かつ、兵士としての彼の個人的体験を取り扱いながらも、彼の作品がヴェトナム戦争文学、または戦争文学という限定的文学ジャンルを乗り越えており、更に、20 世紀の戦後アメリカ文学を考える上では必読書として今日取り扱われることも少なくないという事実を裏付けるものであるといえよう。

引用文献一覧

- Bal, Mieke. *Narratology: Introduction to the Theory of Narrative*. 3rd ed. U of Toronto P, 1985.
- Bourne, Daniel and Debra Shostak. "Artful Dodge Interviews Tim O'Brien." *Conversations with Tim O'Brien*. Ed. Patrick A. Smith. U of Mississippi Press, 2012. 68-87.
- Ciocia, Stefania. *Vietnam and Beyond: Tim O'Brien and the Power of Storytelling*. U of Liverpool P, 2012.
- Riesman, David, Nathan Glazer, and Reuel Denny. *The Lonely Crowd: A Study of the Changing American Character. Abridged Edition with a 1969 Preface*. Yale UP, 1969.
- Farrell, Susan. *Critical Companion with Tim O'Brien: A Literary Reference to His Life and*

- Work. Facts On File, 2011.
- Heberle, Mark A. *A Trauma Artist: Tim O'Brien and the Fiction of Vietnam*. U of Iowa P, 2001.
- Herzog, Tobey C. *Tim O'Brien*. Twayne, 1997.
- . "Conversation with Tim O'Brien." *Writing Vietnam, Writings Life: Caputo, Heinemann, O'Brien, Butler*. U of Iowa Press, 2008. 88-133.
- O'Brien, Tim. *If I Die in a Combat Zone*. Broadway, 1973.
- Schroeder, Eric James. "Maybe So." *Vietnam, We've All Been There: Interviews with American Writers*. Praeger Publishers, 1992. 125-43.
- Vernon, Alex and Catherine Calloway. *Approaches to Teaching the Works of Tim O'Brien*. The Modern Language Association, 2010.
- Woolf, Tom. "The Birth of 'The New Journalism'; Eyewitness by Tom Woolf." *New York Magazine*. 14 Feb. 1972. Web. 10 Aug. 2018. <<http://nymag.com/news/media/47353/#print>>
- 仲正昌樹『集中講義！アメリカ現代思想 — リベラリズムの冒険』NHK 出版, 2008 年.

- 1 本作品は O'Brien がヴェトナムから帰還した後に自身の実体験をもとにした自伝を出版することを意図して執筆したものであるが、フィクションとノンフィクションの要素が複雑に絡み合う語り的手法により、出版当初から読者は本作品をどのようなジャンルの読み物として読むべきなのかということについて長年頭を悩ませてきた。本論文では、本作品を特徴づけるフィクション性を重視し、本作品を小説として取り扱うことで作中人物 Tim O'Brien と作家 Tim O'Brien とを議論の中では区別して言及する。作中人物の O'Brien はこれ以降主人公 O'Brien と表記する。